平和への考察—日独の戦後処理の比較を通して—（要旨）

池乗梨詠

私は卒業論文において平和な未来のために今、私たちが何をすべきかを考えていきたいと思った。そして、第二次世界大戦の敗戦国でありながら、戦後、躍進を続けてきた日本とドイツ（ここでは旧西ドイツに限定して話を進める）に注目し、戦後処理という「過去の克服」をめぐる両国の比較検討を通して、二度と戦争という過ちを繰り返さないための平和への考察を行なった。卒論では、敗戦直後に連合軍によって行なわれた東京裁判とニュルンベルク裁判を主として比較することで「日本の戦後」と「ドイツの戦後」を検討し、戦後処理への対応とその違いを論述した。

その結果、以下のような共通点と相違点があることが分かった。共通点としては①両国は第二次世界大戦の敗戦国である点②戦後、飛躍的に発展し、世界の中心的役割を担うようになった点の二点がある。相違点としては①日本はアメリカ主導の東京裁判を、ドイツはアメリカ、イギリス、フランス、ソ連の四ヶ国主導のニュルンベルク裁判を経験した点②日本は自らの手による戦犯裁判をしなかったが、ドイツはナチス裁判を行なった点③日独をめぐる国際的な環境に大きな相違点が存在する点があげられる。③について詳しく述べると、日本は戦後、冷戦構造を見据えていたアメリカの極東地域における対ソ連の防波堤として位置付けられ、アメリカの強力な後押しを得た。そして、戦後処理ではなく、経済的復興のみに専念し、周辺諸国との連携的発展ではなく、アメリカが提供する国際的環境を利用することにより、経済大国としての地位を得ていった。このため、アジア諸国との戦後処理問題が未だ山積みとなっており、国際的貢献度の欠如を指摘され続けている。一方で、第二次世界大戦により都市機能崩壊という打撃を受けたドイツはヨーロッパ諸国と隣接し、戦後、こうした諸国の援助、協力によって再興したため、それらの反発を回避するために努力した。このため、戦犯訴追等の戦後処理に積極的であり、近年ではEUの中心的な役割を担い、国際的貢献度を称えられている。

このように、戦後の両国を取り巻く環境や見方は大きく異なっている。それはようやく戦後処理が動き出した日本と継続的に戦後処理を続けるドイツといった現状をみても明らかだろう。

私は戦争という難しい課題を前に奮闘しながら、平和の大切さ、実現の難しさを実感することができた。日本とドイツはかつて、武力による侵略を試みて多くの人を傷つけ、また自らも傷ついた。戦後、ドイツはヴァイツゼッカーをはじめとする指導者の下で戦後処理に取り組み、その成果を世界に向けて発信してきた。

ドイツ人のこうした姿勢に見習うべき点は多いと思われる。日本も自らの成果を世界に向けて力強く発信していく必要がある。私たちに課せられた戦後処理という「過去の克服」を念頭におき、アジア諸国との新たな関係構築という「未来責任」を確実に引継ぎ、達成していくことが求められると思った。

（東京三菱銀行）